

へき地学校における地域性を活かした運動享受の教育的可能性

越川 茂 樹
(北海道教育大学釧路校)

Educational Potential of the Enjoyment of Physical Activity in remote Schools utilizing regional Characteristics

Shigeki KOSHIKAWA

(Hokkaido University of Education Kushiro Campus)

概 要

へき地学校においては、その日常に孕む問題の主なものとして、児童・生徒の身体活動量に関わる問題や人間関係が限られるという点が一般に指摘されている。これらの点に対して、地域というフィールドを活かした運動享受は一つの可能性を有していると考えられる。そこで本稿では、へき地学校における地域環境を活かした運動享受の実践として「地域をめぐる運動」を取り上げ、その存在様態を示し、人間学的視点から「地域をめぐる運動」の教育的可能性について言及することとした。それは以下のようにまとめられる。生きる意味を多面的・多角的にデザインできる構想力を育むことが求められている教育において、遊びの生成性が重要な意味を持つ。こうした遊びの性格に基づいた「地域をめぐる運動」としてのトレイルランニングについては、トレイルを移動すること自体に生まれる面白さの経験が自己変容に作用すると考えられる。また、マラニックでは、走る、歩くといった運動に付加される活動によって膨らむ移動の行い方に生まれる面白さを享受する経験に自己変容が起こり得る。そして、これらの運動固有の面白さに触れ味わう中で、地域の自然や歴史・文化を知り、面白さを味わうことが誰でも生涯にわたりできるように、運動の場を自分たちで維持していく態度が養われていく。このように地域をめぐる運動を行う中で豊かに学びの経験が編み上げられていく。

1. はじめに

へき地学校においては、その日常に孕む問題がしばしば指摘されている。その主なものの一つが、児童・生徒の身体活動量に関わる問題である。へき地学校では、通学に長距離を要するためスクールバスや親の車による送迎は珍しくはない。そのため、必然的に1日の身体活動の量は、徒歩通学に対して少なくなる。したがって、日常においてほぼ自動的に成り立っている運動習慣の一面が確保されることはなく、過体重や肥満を招くことにもなりかねない^{注1)}。実際2019年度における学校保健統計調査によると、例えば、北海道における肥満傾向の小学4年と中学1年の児童・生徒の割合は、全国平均が9.24%と9.86%に対して、14.25%と12.41%である。この数値の背後には、北海道におけるへき地学校の割合が35.5%を占め、その多くはスクールバスや親の車による送迎によって通学しているという現状があることも少なからず関係しているであろう。

また、へき地・小規模校を取り巻く環境として人間関係が限られるという点が一般に指摘されている^{注2)}。そして、そのことがコミュニケーション能力の問題として語られることが少なくない。コミュニケーションを自らの常識を背

景におきつつ、共通性を見出しその中でやり取りをすることとするならば、これを磨くには、多様な他者（人、モノ、環境）との交流の中で試行錯誤する機会を保証することが大切であり、そうした体験や経験が重要となる。

さらに、学校それぞれの地域性を活かした学習活動を取り入れる一方で、過度に都市部の実践に合わせようとする傾向がしばしば見受けられる。ここには、一定の教育水準の担保といった責務があると思われる。もちろん、それは否定されるものではない。こうした傾向に対して問われるべきは、根底に知識や技能の習得を絶対的な目標とする教育観が前提としてあるのではないかということ、上の学校種を念頭に置いた「下請け型教育」の思想があるのではないかということである。

これらの問題に対して、どのように考え、いかに対応していくかがへき地学校には求められている。それは、学校教育全体としてはもちろんのこと、体育科・保健体育科にとっても他分野と同じように、どう受け止め、引き受けていくのかが問われているということである。

他方、学校体育に対して今日スポーツには個人の成長や社会の発展に貢献する豊かな可能性があるという理解に基づき、良質な内容を提供することが世界的に求められている。

そして、それに応じて現在、体力や運動能力に留まるものではなく、スポーツをすることへの動機づけや知識、理解、価値観、人間関係にかかわるスキル等に及ぶ、生涯にわたりスポーツに親しむ資質・能力^{注3)}が体育に期待される成果であるとの認識が国際的に共有され、そのための良質な体育が志向されるようになってきている(岡出, 2016, p.14). また、スポーツの価値として、個人の人生において有益であるといった個性だけでなく、地域をはじめとするさまざまなコミュニティや社会全体といった場においても重要な役割を担うことができるという認識が共有されている。とりわけ地球規模で持続可能な社会に向けて開発と平和がその大切な課題となっている中で、スポーツがそれらを後押しする上で有効であるという認識がなされ、スポーツによる貢献が求められている(UNESCO, 2015)。

この点も当然のことながら、へき地校においてどのように受け止め、具体的に実践して行くかといった課題として位置づけられる。すなわち、子どもたちの人格形成や価値観、社会的能力の形成に効果的に働く可能性の高い運動を学ぶ環境としての体育、地域的な課題の解決に手がかりを与え得るスポーツの学びを子どもたちに保証していくことが、へき地に位置する学校においても求められている。それゆえ、人間としての可能性を十全に発揮できる豊かな教育環境を、それぞれの地域の自然、文化、ならびに歴史的な条件をふまえながら、子どもの外側からの知識や技術、しくみやしつけ等を照合しつつ、学校が自律的に創出していくことが重要な役割としてあげられる。

とりわけ、へき地学校の中でも小規模校は、統廃合が進む中で地域の文化を支える貴重な場であり、最後の砦と言っても過言ではない^{注4)}。このような性格を有する学校では、それぞれの地域性を活かした学習活動が、身近に感じられる内容や実施しやすい活動である可能性は高く、子どもたちの学びが深まることが期待できる(玉井, 2013; 中妻, 2107)。また、子どもの学びにとって、学ぶ意欲や地域への誇り・自信を高める上で、地域性を活かした授業づくりやカリキュラムのデザインが重要な役割を担っている(玉井, 2017, p.7)。したがって、このような点を生かした取り組みがますます大切となる。

こうした理解のもとで、地域というフィールドを活かした運動享受は一つの可能性を有していると考えられる^{注5)}。なぜなら、へき地学校には自然や文化・歴史等の豊富な資源があるからである。そして、運動という直接経験は、子どもたちにとって自己や身体の実験や社会的な経験、モノの実験を可能とする(Grupe, 1976)からである。

そこで本稿では、へき地学校における地域環境を活かした運動享受の実践として「地域をめぐる運動」を取り上げ、その存在様態を示し、人間学的視点から「地域をめぐる運動」の教育的可能性について言及する。

2. 「地域をめぐる運動」の存在様態

2.1. 「地域をめぐる運動」の魅力

「地域をめぐる運動」のめぐるとは、「一定の経路に従って進んで戻る」「あちこちと移り動く」「あることを中心としてつながり合う」という意味である。昨今各地で日常的にロード(舗装された道)やトレイル(不整地)を歩いたり、走ったりする運動やそうした運動をベースに行い方を工夫した地域をめぐるマラニックやロゲイニング^{注6)}等が、各地域において多くの人々により単独で、あるいは仲間とともに親しまれている。自然道、林道や登山道等のトレイルを移動したり、大会やイベントに参加したりする中で楽しさを享受する場となっている「地域をめぐる運動」は、色々な移動の仕方でも地域をめぐる設定したゴールに向かう過程が面白さを生む。また、その過程を競い合いや自らの力を十全に発揮して成し遂げるといった状況を設定する(行い方を工夫する)中で醍醐味を増していく。また、マラニックやロゲイニング等のように活動を組み合わせる中で、多様な楽しさを享受するものもある。ここでは、トレイルランニング(以下トレランと記す)とマラニック^{注7)}を取り上げてその魅力を整理していく。

近年、不整地を走るトレランが身近な運動になりつつある。それにはトレランの大会やイベント等が大きな影響を与えている。こうした催しの中で、さまざまな路面状況をいかにも移動して、設定したゴールに辿り着くことができるかどうかの緊張状態に面白さが生まれる。ランナーは、こうした緊張状態において、どれだけ短い時間で完走することができるかどうかを競い合ったり、自分自身のできる限りの力を発揮して成し遂げようとしたりする。主催者は、そうした場を整えて面白くしようと工夫する。大会やイベント等組織化された運動の形態が拡がると、トレイルを移動する運動を愛好するランナーが増え、彼らは独特の楽しさに出会い、多種多様な楽しさを味わう。実際、トレランにおいて、「登山やハイキング感覚で、地形や植物などの自然景観、森林浴」(松岡, 2020, p.35)、自然の美しさ、気分の清々しさ、開放感、変化に富んだ地形を走ること、飽きずに結果的に負荷の高い走りができるというトレーニング効果、レースにおいてはロードよりも連帯感を感じることができる(佐々木, 2014, p.21)等、個人においてさまざまな楽しさが享受されている。

マラニックも、ロードやトレイルを歩いたり、走ったりしながら行う活動として今日多くの地域で人々に親しまれたり、催されたりしている。マラニックとは、マラソンとピクニックの造語である。山西(2010)によれば、1960年のローマオリンピックで3人ものメダリストを育てたアサー・リディアード氏のマラソントレーニングの中に「マラニック」^{注8)}があったという。これを山西らは、日本において1970年代以来ゆっくり長い時間をかけて走り、歩き続けながら走る楽しさを満喫する方法と定義づけ、実践してきたという(山西, 2010, p.6)。今日では、タイムや順

位を競うのではなく、それぞれのペースで歩いたり、走ったりして自然の景色や観光名所、史跡等をめぐりながら楽しみを享受するスポーツとして理解されている。間 (2016, p.90) は、マラニックの良さは、走る+自然観察、走る+泳ぐ、走る+カヌー、走る+自転車、走る+歴史探訪、走る+グルメ、走る+観光、…とどこかへの移動手段をランニングにして、その過程に何かの楽しみをプラスして、道中そのものも楽しむことがマラニックであるとさらに広く捉えている。そして、このように楽しみながら走ることに重きをおいて、走ること以外の楽しみをプラスすることで走りの幅を広げて、走りのみならず生活を豊かにする効果を期待できるのがマラニックであるという (間, 2016, p.90)。マラニックにおいては、歩いたり走ったりしながら、色々な場所をめぐりながら人やモノと出会ったり、新たな発見をしたりすることから面白さが実感されるであろう。マラニックには競い合うのではなく、ゆったりとした時間経過の中で動き続ける時間を満喫すること自体に面白さが潜んでいるようである。その中で一人ひとりが、色々な楽しさを実感するであろうし、自らマラニックを準備することから始まるのであれば、「テーマを決めて走ること」(秋房・福田, 2020, p.57) や「企画の構想を練ること」(秋房・福田, 2020, p.58) 等も楽しい活動となり、これらを含めてマラニックの魅力になるであろう。

2.2 「地域をめぐる運動」の享受がもたらす問題性と公益性

こうした自然や文化等とつながる「地域をめぐる運動」には、希少生物の保護や環境への配慮の問題がある。この点は、大会やイベントのみならず、個人や仲間で行う際にも当然当てはまる。例えば、トレランでは、安全面、自然保護、ハイカー等の他者との関係性において問題になっている面がある (佐々木, 2014, p.20)。さまざまな催しのみならず、人が野山に分け入る際にはいつでも環境への配慮を怠ってはならないのである。日常的に野山を使用するトレランでは、私有地を除き、林野でも自然公園でも、動植物の採取といった禁止事項を除けば自由に「場」として使用できるが、その場合でも使用している「場」の生態系や地域住民の生業との結びつきへの理解と配慮が必要である (天野, 2021, p.126)。また、マラニックでも観光名所や文化財や史跡等に対する配慮は当然のことである。すなわち、運動を行う人々は、地域の自然環境情報や文化財や史跡等を理解し、分別ある行動を徹底しなければならない。また、自治体や地域のスポーツ関係団体等には日常的に容易にアクセス可能な情報提供に取り組むことが求められる (天野, 2021, p.126)。そうした中でこそ「地域をめぐる運動」が実施でき、多様な楽しみを享受することが持続的に可能となる。

「山を壊す」「自然を荒らす」といったトレラン批判がある一方で、さまざまなトレイルを走ることが自然保護と山道の再生に寄与しているという例も少なくない (大島,

2014, p.104)。自ずと廃れることを余儀なくされていた峠道や狭く険しい林道、登山道などがハイカーやトレイルランナーによって使われることで再び道として整備され、山に分け入る際の安全性が向上する。トレランといった運動形態によって、かつて地域において人が通った古の道、現在は廃道となっていたり、登山道となっていたりしていた道を再整備・再認識する機会を与えることにつながる (鍋木, 2009, p.43)。また、それによってこれまで埋もれていた地域の自然や歴史を知ることにつながる。それは郷土に誇りをもつこととも結びついていくであろう。

山にはそこで活動する人同士の間のルールやマナー、そして環境に負荷をかけない行動様式が求められる (山西, 2018)。また、それは文化財や史跡等と触れ合う際にも当てはまる。そのことを肝に銘じ、「地域をめぐる運動」として、トレランやマラニックを行うことが、文化的享受を可能にし、我々にとっての意味を豊かに醸成し続けることとなろう。

2.3. 遊びとしての「地域をめぐる運動」

山西 (2013) は、三つの漢字表記の異なる「みち」に人が走る道という点を結びつけて走ることへの想いを巡らしている。それによると、「路」は道路や線路のように決められた道、「道」は、舗装ではない土でできた田畑の中の農道や自然の香りのする野山の道、そして「途」は、旅の途中のようにぶらぶらとまわりの景色を観ながら通り抜けていくイメージである (山西, 2013, p.11)。こうしたイメージのみちにおける走り心地について、山西 (2013, pp.11-14) は語る。「路」を走るとは、歩行者や自転車、自動車が往来する日常の生活道路を、走る人は日常の道路をいつもの生活から離れた表情と動きで息を弾ませて走る時間と空間 (山西, 2013, p.11) にする。つまり、走る人が路を流用し、走ることに遊ぶ時空間として意味づける。「道」は人工的な「路」に対して舗装されていない土道や草道、畦道であるゆえ、足元が舗装の道よりも柔らかさと足裏の動きを感じ、体全体で軽やかな感覚が伝わって、走る楽しさが増す (山西, 2013, p.12)。また、日ごろは歩く人中心の道であり、道端には草花が咲き、木々の多い自然豊かな自ずと走りたくなってくる場所である (山西, 2013, p.12)。つまり、さまざまな環境下にある道に誘われて走る意欲がみなぎるといふ走る人の心情を、山西は解釈し、走ること自体の楽しさを見ている。そして「途」とは、目的に至る途中を意味することから、山西 (2013, p.13) はランナーはいつも今日は何分走ろうか、どこまで走ってくるかと決めて走り始めるが、そこに自由を感じて自ら決めた目標に向かって走ることがランナーの楽しみであるという。なかでもジョガーやゆっくり走る人は、走る途としてゴールより、ゴールまでの途中を楽しむ人であり、途中をエンジョイする過程型のランナーであると山西 (2013, p.14) は語る。そして、こうしたランナーは五感を働かせながら、豊かな走りを創っていく (山西, 2013, p.14) とし、その典型的な活動としてのマラニックの世界観を説明する。

こうした地域の道を歩いたり、走ったりして移動するに
対して、今日、多くの人々が楽しさや幸せを感じている。また、こうした状況を反映して、ランニングを文化として追及することをめざし、そのため文化としてのランニングの捉え方や考え方をどのように創造していくのかを問うていくことを旨とした定期刊行物もみられる。その一つに『ランニングの世界』がある。この創刊号は「楽しく走る」を特集テーマとし、21号では「楽しきかなマラニック」(2016)、そして23号は「走る楽しさ、走る喜び」(2018)という特集を組んでいる。その中で共通する認識は、走る楽しさと幸せの根底に「遊びとしてのランニング」である(シーハン, 1981; ローランズ, 2013; 村松, 2018; 山西, 2018; 小川, 2018; 北島, 2018)。

遊び学者のシカール^{注9)}(2019, pp.22-25)によれば、遊びとは、文脈に依存し、文脈は遊びを成り立たせるのに、必要な事物、人、場所のネットワークであり、遊びの文脈を作り上げるとともに、遊びの文脈であるという理解を共有することを可能にする形式的な道具がルールであると述べる。また、遊びとはルールから生まれ、ルールによって媒介され、ルールを通して位置づけられ、遊び手と遊ぶという明確な意志によって成立するものであり、ルールは遊びの文脈の複雑なネットワークにおけるノード(結節点)であり、遊ぶという目的の手段である(シカール, 2019, pp.25-26)と説く。さらに、遊びはそこで使われる物を流用することによって成り立ち、遊びにおいては私たちは常のそこに巻き込まれるものに対して遊びの文脈に即した意味づけをすると遊びの流用性という特徴があると、シカール(2019, p.34)は指摘する。こうした理解からも、トレランとマラニックといった「地域をめぐる運動」の遊びとしてのありようが説明される。すなわち、地域の風景や人と車の往来する道を流用し、そこに独特の行い方を決めて活動することで遊びとしての文脈が生まれ、活動する人々が「地域をめぐる運動」を遊びとして享受がする。「地域をめぐる運動」としてのトレランでは、地域の色々な形状の道を移動して設定したゴールに向かう過程、つまり完踏できるかどうかの緊張状態に面白さが発生する。また、その過程を競い合いや自らの力を十全に発揮して成し遂げるという状況を設定する中で醍醐味を増していく。マラニックでは、活動を組み合わせた行い方に沿って活動し、その世界において「～(できる)かどうか」を堪能する。こうして遊びとしての文脈において固有の面白さを味わう「地域をめぐる運動」が現れる。

3. 生の充実としての「地域をめぐる運動」の経験

3.1. 生の充実としての教育

教育とは、広義には「人間の成長全体を支えるもの」として捉えられ、それは人間形成という言葉で表現される(木村, 2019, p.13)。今日、社会が複雑化し、激しい変化を余儀なくされている今日においては、一人ひとりが自らの

可能性を生涯にわたり切り拓く営み、ならびに自らの環境を主体的に整えていくこととしての教育が未来を切り拓いていく上で必要とされている(越川, 2017, p.192)。また、テクノロジーの進展する社会において、教育はますます実利的な側面における力の獲得が求められている中で、教育が子ども自身が楽しいとか、意味ある等と感じられるかどうかという観点から問い直されなければならないという意味的側面の大切さが訴えられている(斉藤, 2017; 高橋, 2019)。

桐田(2000, p.90)は、教育の営みとして、「社会適応と生の躍動」があり、我々は、日常的現実の中で、社会制度の圧力にさらされながらも、人間の二重性の葛藤を生きていると述べる^{注10)}。そして、日常的現実において社会制度の支配の中では、生の躍動を経験し難いが、現実を相対化する姿勢の形成には、生成の経験が大きく影響しているとし、この経験は存在の喜びの原点であり、日常的現実に関われることから距離を取る力となるといい、遊びがその一つであると述べる(桐田2000, p.92)。

また、教育人間学者の高橋(2019, p.40)は、生き抜くためのスキルとそれを活用する力を身につけること以上に、生きる意味を多面的・多角的にデザインできる構想力を育むことが今まさに学校教育において求められていると述べる。ここで意味とは、外の世界との交流を通して、人の内部から湧き起こってくるものであり、コトバではなく体感するものを示す(高橋, 2019, pp.27-28)。意味はコトバでしか説明できないが、我々が意味を理解できるのは、認識のレベルだけではなく、生感情や暗黙知のレベルまで届かなければ「腑に落ちない」ということである(高橋, 2019, p.126)。すなわち、意味とは理屈ではなく我々がいるその場所で感じ取られる気分や生感情に深く根ざしているということである(高橋, 2019, p.126)。そして、さまざまな活動や仲間と出会い、学ぶ意味や生きる意味がごく自然に感受できる場所こそが意味が立ち上がる場所であると高橋(2019, p.50)は語る。つまり、これは、教育の中で他者とのかわりににおいて編み上げられる、人間の生^{注11)}における意味充実の視点が大切であるとの指摘である。

こうした考え方のもとで、今日教育とは、動的な人間観に基づいた生の充実として理解され、そこでは遊びの生成性が重要な意味を持つといえる。遊びは社会制度に先立つ感情としての生命の流れを感じさせる体験(桐田, 2000, p.109)であり、それは自己を超えて自己を築く「自己変容の経験」(高橋, 2014)を可能にするのである。

他方、佐伯(2006a, p.305)は、現代社会では、暮らしの中で豊かに文化を享受する質の高い暮らし、すなわち、「生き生きとした生、豊かな交流、伸びやかな自己開発」を人生の全体にわたって求める生活を人々は望むが、スポーツはその重要な内容となる可能性を有していると述べる。つまり、そうしたスポーツの文化的可能性が拓かれるのであれば、身体的・知的・感性的な全面的な人間的可能性を開発し、トータルヒューマニティ^{注12)}の享受を実現すると述

べる（佐伯，2006a，p.310）。

このような社会における人間と運動との関係の理解からみると、教育の営みも生活創造であり、学びも生きる力の開発であるなら、クオリティ・ライフにおいてデザインされる人々の運動に対する期待や求めに注目する必要がある（佐伯，2006b，p.284）。そして、こうした点を中核とするスポーツの文化的享受が体育の重要な役割であり、学習の方向性となる。こうしたスポーツの享受について、佐伯（2006b，p.285）は、知的にも感性的にもスポーツを味わうことであり、自在な運動の喜びを基調にする身体的幸福の体験を楽しみながら、トータルなヒューマニティの開発を通じて得られる身体的自由の豊かな享受としてとらえる。ここに生の充実としての人間の成長全体を支える教育観がみられる。

こうした教育のとらえ方に沿って、次にトレランとマラニックといった「地域をめぐる運動」の享受の教育的可能性に言及することとする。

3.2. 「地域をめぐる運動」の享受の教育的可能性

トレランやマラニックといった「地域をめぐる運動」は、地域の風景や人と車の往来する道を流用し、そこに独特の行い方を決めて活動することで遊びとしての文脈が生まれ、人々が「地域をめぐる運動」それぞれの固有の魅力に出会い、味わうことでその運動に遊ぶ。

そうした運動世界の経験の中で、トレランについては、トレイルを移動すること自体に生まれる面白さの経験が自己変容に作用する。トレランは、さまざまな路面状況をいかに移動し設定したゴールに辿り着くことができるかどうかの緊張状態に面白さが生まれる。また、緊張状態を想像力・想像力を働かせ自由に、今の力を十全に発揮し、（どれだけ短い時間で）完踏することができるかどうかを競い合ったり、自分自身のできる限りの力を発揮して成し遂げようとしたりする中で楽しさが広がる。そしてこうした経験を可能にする場合は、主催者による遊び心を駆使した工夫に満たされているのであるが、そうした場における経験に大きな可能性が秘められている。また、マラニックでは、走る、歩くといった運動に付加される活動によって膨らむ移動の行い方に生まれる面白さを享受する経験に自己変容が起り得る。マラニックにおいては、歩いたり走ったりしながら、色々な場所をめぐる中で人やモノと出会ったり、新たな発見をしたりすることから面白さが実感されたり、ゆったりとした時間経過の中で動き続ける時間を満喫したりする経験が、行う人のこれまでの経験の位相を切り崩すとともに、新たな眺望を生み出し、そこに自己を超えて新たな自己の生成を促すといった自己のありようを実感する可能性がある。

いずれにおいても道を移動する行為への意味づけに拡がりや深まりが生まれ、そのダイナミックな展開の中で活動の当事者に対して生の充実としての教育が芽吹くと考えられる。また、これらの運動の面白さに根ざした文脈に活動の当事者として身を置き、多様な楽しみを一人ひとりが出

会い、触れて、味わうことによって「生き生きとした生、豊かな交流、伸びやかな自己開発」としての文化的可能性を拓き、人間的可能性を開花させる。

トレランでは、地域の色々な形状の道を移動して設定したゴールに向かう過程、つまり完踏できるかどうかの緊張状態に発生する面白さに出会い、味わうこと、マラニックでは活動を組み合わせた行い方に沿って活動し、その世界において「～（できる）かどうか」を堪能することにおいて、自己変容が発現し、ダイナミックに持続していくことの中に教育的可能性が拓かれる。そして、これらの運動を、その固有の面白さに触れ味わう中で、地域の自然や歴史・文化を知り、面白さを味わうことがいつまでもできるように、運動の場を自分たちで維持していく態度が養われていく。このように運動する中で学びの経験が編み上げられていく。つまり、面白さを享受しているからこそ、運動自体とそれが可能となる場を行う人自身が大切にすることを学び実践するということである。

4. まとめ

本稿では、へき地学校における地域環境を活かした運動享受の実践として「地域をめぐる運動」を取り上げ、その存在様態を示し、人間学的視点から「地域をめぐる運動」の教育的可能性について言及してきた。

今日学校教育は、実利的な側面における力の獲得を越えて、子ども自身が楽しいとか、意味ある等と感じられるかどうかという観点から問い直されなければならない。否、意味充実のいう視点から、さらにいうなら生の充実という視座からその実践が構想されることが求められている。

トレランやマラニックにおいては、それが遊びとして享受され、自然や文化・歴史との出会い・触れ合いにおいて楽しみや幸せを感じ、生きることと暮らすことの時間的・空間的な拡がりや深まりという意味での生を豊かにする可能性が拓かれる。前者では、地域の色々な形状の道を移動して設定したゴールに向かう過程、つまり完踏できるかどうかの緊張状態に発生する面白さに出会い、味わうこと、後者では活動を組み合わせた行い方に沿って活動し、その世界において「～（できる）かどうか」を堪能することにおいて、自己変容が現れ、ダイナミックに持続していく中に教育的可能性が拓かれる。

こうした「地域をめぐる運動」について、授業の枠のみならず、学校におけるスポーツ活動全体において、その学びの経験をいかに紡いでいくかデザインすることが求められる。その際、活動する人同士の間のルールやマナー、そして環境に負荷をかけない、文化財や史跡等をみんなで大切にする行動様式が求められる。このような「地域をめぐる運動」を行う人々の共同的な運動環境づくりが、運動の文化的享受を可能にし、運動の意味を豊かに醸成し続け、その教育的可能性をさらに豊かに拓くことを導くと考える。

注

- 注1) 清水ら (2015) は、こうした危惧からへき地校と都会の学校の比較調査を行い、今後さらに健康面から検討する必要性を説いている。
- 注2) とはいえ、限られた人間関係の中では文化や慣習生活様式等において独自性を生み出すことがある。逆に融通の利かなさが前面に出て交流を難しくする場合もあり得る。
- 注3) この考え方は、国際的には、一人ひとりの能力に応じた、生涯にわたり身体活動を維持する、動機づけ、自信、フィジカルコンピテンシー (身体的な能力)、知識、ならびに理解を意味する「フィジカルリテラシー (physical literacy)」(ホワイトヘッド, 2010, pp.11-12) として示されている。
- 注4) 玉井 (2005, p.198) は、へき地では学校は地域の文化センターであり、地域住民の地域意識や地域のまとまりを作る結節点となっているため、廃校になると地域戦隊のまとまりや生活意欲が低下し、急速に地域の崩壊を招く場合が少なくないと指摘する。
- 注5) 海外の動向を見ると、例えば、ドイツではスポーツが享受される空間の教育的可能性を議論している。その中で森や公園、緑地等も取り上げられ検討されている (Bindel/Schwarz, 2017)。また、森をフィールドにした小学校における学校イベントの取り組みの実践例 (Cwierzdzinski/Godoy, 2018) も紹介されている。
- 注6) ロゲイニングとは、主に山、森林、高原などの自然の中で、コンパスと地図を持ち指定されたコントロールポイントをまわりいかに多く得点を獲得するかを競い合うオーストラリア発祥のナビゲーションスポーツである (日本ロゲイニング協会HP)。1976年に誕生したこのスポーツをもとに、2002年にフォトロゲイニングが長野県菅平高原にて初めて開催された (日本フォトロゲイニング協会HP)。一方、オリエンテーリングとは、専用に作られた地図を使って、大自然の中に設置されたチェックポイント (コントロール) を辿りながら可能な限り短時間で走破するアウトドアスポーツを指す (日本オリエンテーリング協会HP)。
- 注7) 神奈川県逗子市において、子どもたちを対象としたトレイルランニングのイベント開催やクラブ設立といったトレイルランニングに親しむ機会を子どもたちに提供する取り組みがなされている (Fujio ProjectHP)。また、中学校の授業において、「長距離走=苦しい」というイメージを取り除き、面白さを軸に学習を意味あるものにしていこうという観点からマラニックを導入している事例 (浦野, 1997) もみられる。
- 注8) 山西 (2010, p.6) によると、日本では、元々は高橋進氏がマラソンのトレーニングプログラムの中に

「マラトニック」と称して取り入れていた疲労回復のための積極的な休養トレーニングであったらしい。

- 注9) 松永 (2019, p.219) は、シカールの遊び論の独自性は、遊びが持つ複数の特性をまとめ、その輪郭を明確にしたことにあると指摘する。その中で、遊びの「文脈依存的」、「流用的」という特性が、存在のモードとして表れる「活動」としての遊びと態度としての「遊び心」と結びついて、彼の遊びをめぐる理解を特徴づけている。
- 注10) ここには、人間とは行為する存在 (ゲーレン, 1985) であるゆえ、人間は社会制度に規定されるとともに、それを越えた存在でもある (バルクソン, 1981, p.309; グルーペ, 2000, pp.199-200; 桐田2000, p.90) という人間観がある。
- 注11) 高橋 (2014, ii) は、人間の「生」は、生命的なカテゴリーと社会的なカテゴリーの領域を包摂する膨らみを持ちつつも、どちらか一方には還元できない質のものであり、さらに人生、一生、生涯といった時間的カテゴリーも含まれていると整理する。そして、生命と生活という二つの系を織り込みながら、水路のように常に流れ行くもの (生涯)、しかも水路のようにあらかじめ流れる先が決まっていない、流動と生成のイメージでそれをとらえる (高橋, 2014, iii)。
- 注12) 佐伯 (2006a, pp.310-312) は、身体的・知的・感性的な全面的な人間的可能性の開発と享受としてイメージする。それによると、身体的諸能力の自由な行使の楽しみの探求によって身体的可能性を開発する喜びを享受する、また、その過程において知的諸能力も行使し、発揮する。そして楽しみと悲しみ、喜びと苦悩、孤独と連帯等に関わる人間的存在に内在する深い情緒を体験したり、洗練して表現したりすることを通して感性的諸能力を開発し享受する。スポーツにはそうした人間的諸能力を開発し享受する可能性があるという。

附記

本研究は、令和2年度北海道教育大学へき地・小規模校教育研究センターの研究補助金を受けて行われた。

文献

- 間むつみ (2016) マラニックのこころ。山西哲郎編, ランニングの世界21, 創文企画, pp.86-93.
- 秋房麻理・福田珠巳 (2020) マラニックをつくる - 明智光秀の足跡をたどって. 地理, 65 (8) : 57-64.
- 天野和彦 (2021) 自然環境政策におけるスポーツ. 真山達志・成瀬和弥編, 公共政策の中のスポーツ. 晃洋書房, pp.117-134.
- アルノルト・ゲーレン: 平野具男訳 (1985) 人間 その本性および世界における位置. 法政大学出版局.

- Bindel,T.,Schwarz,R. (2017) Sport-Räume Entwicklungspotenziale,Problematiken und pädagogische Möglichkeiten. sportpädagogik,41 (2) : 2-7.
- Cwierdzinski,P.,Godoy,B. (2018) Durch den Wald und um den Teich. sportpädagogik,42 (2) : 24-27.
- Fujio Project. <https://www.fujioproject.jp> (参照日2021年9月12日)
- 学校保健統計調査平成27年度以降 都道府県表. <https://www.e-stat.go.jp/dbview?sid=0003146560/> (参照日2021年7月22日)
- Grupe,O. (1976) Was ist und was bedeutet Bewegung? In:Hahn,E.,Preising,W. (Hrsg.) Die menschliche Bewegung -Human movement,pp.3-35.
- ジョージ・シーハン：新島義昭訳 (1981) シーハン博士のランニング人間学. 森林書房. <Sheehan,G. (1978) Running & Being. Rodale.>
- 鍋木毅 (2009) トレイルランニングレースで地域活性化について. ランニング学研究, 21 : 41-45.
- 木村元 (2019) 教育とは何か -教育の概念. 木村元・小玉重夫・船橋一男, 教育学をつかむ [改訂版], 有斐閣, pp.13-21.
- 桐田克利 (2000) 遊びの躍動. 亀山佳明・麻生武・矢野智司, 野生の教育をめざして. 新曜社, pp.88-111.
- 北島政明 (2018) ランニングを遊ぶ. ランニングの世界 23, 創文企画, pp.54-53.
- 越川茂樹 (2017) 体育・保健体育科に求められる「能力」. 玉井康之・北海道教育大学釧路校教師教育研究会編：子どもの“総合的な能力”の育成と生きる力, 北樹出版：東京, pp.188-193.
- マーク・ローランズ (2013) 哲学者が走る 人生の意味についてランニングが教えてくれたこと. 白水社.
- 松永伸司 (2019) あとがき. ミゲル・シカール：松永伸司訳 (2019) プレイ・マターズ 遊び心の哲学. フィルムアート社, pp.217-221.
- 松岡憲知 (2020) マラソンコースを地形学で読み解く. 地理, 65 (8) : 34-42.
- ミゲル・シカール：松永伸司訳 (2019) プレイ・マターズ 遊び心の哲学. フィルムアート社.
- 村松達也 (2018) 走る楽しさ, 走る喜び. ランニングの世界23, 創文企画, pp.8-16.
- 中妻雅彦 (2017) 子ども中心の授業実践に生かすへき地小規模校教育の可能性. へき地教育研究, 72 : 11-18.
- 日本フォトリゲイニング協会：「ロゲイニング」とは？ <https://photorogaining.com/about/history/> (参照日2021年7月23日)
- 日本オリエンテーリング協会：オリエンテーリングをやってみよう. <http://www.orienteering.or.jp/lets/> (参照日2021年8月31日)
- 日本ロゲイニング協会：ロゲイニングとは. <https://www.rogaining.jp/about> (参照日2021年8月31日)
- 小川壮太 (2018) 自然走の楽しさ. ランニングの世界23, 創文企画, pp.44-53.
- 岡出美則 (2016) 体育の理念はどう変わってきたのか. 友添秀則・岡出美則, 教養としての体育原理, 大修館書店, pp.14-19.
- オモロー・グルーペ, ミハエル・クリューガー：永島惇正・岡出美則・市場俊之・有賀郁敏・越川茂樹 (2000) スポーツと教育 ドイツ・スポーツ教育学への誘い. ベースボールマガジン社.
- 大島幸夫 (2014) 走り屋たちの「山おこし」 -まずは里山から自立自援のマイトレイルを楽しもう-. ランニングの世界18, 創文企画, pp.94-105.
- 佐伯年詩雄 (2006a) 現代スポーツを読む スポーツ考現学の試み. 世界思想社.
- 佐伯年詩雄 (2006b) これからの体育を学ぶ人のために. 世界思想社.
- 斎藤里美 (2017) 人工知能とエンハンスメントの時代における「学ぶ意味」と「学力」 -「人工知能と人間社会に関する懇談会」諸資料の批判的検討を通して-. 教育学研究, 84 (4) : 14-24.
- 佐々木誠 (2014) 私たちのトレイルランニング. ランニングの世界18, 創文企画, pp.18-31.
- 清水将・清水茂幸・栗林徹・鎌田安久・澤村省逸・上濱龍也・浜上洋平 (2015) へき地・小規模校における子どもの体力と生活運動量の関係 -体づくり運動を活性化させる教育活動の基礎的検討-. 岩手大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要, 14 : 191-199.
- 高橋勝 (2014) 流動する生の自己生成 教育人間学の視界. 東信堂.
- 高橋勝 (2019) 応答する〈生〉のために 〈力の開発〉から〈生きる喜び〉へ. 東信堂.
- 玉井康之 (2005) へき地・小規模校教育研究の領域と現代的な可能性 -研究課題の試論的展望-. へき地教育研究, 60 : 137-141
- 玉井康之 (2013) 北海道のへき地の地域性を活かした地域教材開発とカリキュラム開発の必要性. へき地教育研究, 68 : 1-12.
- 玉井康之 (2017) 総人口減少社会におけるへき地小規模校教育の特性と政策課題とのアナロジー分析. へき地教育研究, 72 : 1-10.
- UNESCO：日本学術会議健康・生活科学委員会健康・スポーツ科学分科会監訳 (2015) 体育・身体活動・スポーツに関する国際憲章. <http://jaaspehs.com/wp/wp-content/uploads/2016/10/076f5cf42511ddf2d0c7485a5414c983.pdf>
- <UNESCO (2015) International Charter of Physical Education, Physical Activity and Sport. <http://jaaspehs.com/wp/wp-content/uploads/2016/10/d456e8c8ad59a5cfe32f55aa5f23567e1.pdf>> (参照日2021年8月31日)

- 浦野二三夫 (1997) 生涯スポーツに結びつく長距離走の授業をめざして - マラニックの実践を通して -. 学校体育, 50 (5) : 56-61.
- Whitehead,M. (2010) The concept of physical literacy. In:Whitehead,M. (Ed.) Physical literacy. Routledge: London, pp.11-12.
- 山西哲郎 (2010) 楽しきマラニック. 山西哲郎編, マラニックのススメ, 創文企画, pp.4-11.
- 山西哲郎 (2013) 走る路・道・途. 山西哲郎編, ランニングの世界15, 創文企画, pp.8-19.
- 山西哲郎 (2016) マラニック事始め. 山西哲郎編, ランニングの世界21, 創文企画, pp.8-17.
- 山西哲郎編 (2018) [対談] 石川弘樹×山西哲郎 自然と人生の起伏を戯れる楽しさ. ランニングの世界23, 創文企画, pp.17-32.